

# Dr. 和の町医者日記



## 膵臓シリーズ①

「君の膵臓をたべたい」という本がベストセラーになり、映画化もされました。きつと「膵臓」が大切な臓器だから小説のタイトルになったのでしょうか。しかし「膵臓」がどんな臓器なのかをイメージできる人はまれでしょう。

私はかつて大阪大第二内科の胃腸膵研究室に所属し、「膵臓外来」を担当していました。また、膵臓の病気のさまざまな画像診断も行っていました。だから膵臓という臓器を、少しは知っています。今回からは、とても重要な臓器であるにもかかわらず、意外と知られていない膵臓について書いていきます。

まず、膵臓はどこにあるのでしょうか。そう聞かれて答えられる人はそれほど多くないと思います。正解は「胃の裏」で

す。「おなかの奥」というように、「背骨の前」と言ったほうがいかもしれません。ですから膵臓に炎症が起きた場合、多くの人は「背中が痛い」と訴えます。

次に、どんな形状をしているのでしょうか。長さ15センチほどのタラコのような格好です。あるいはウナギのようなイメージかな。頭(膵頭部)と胴体(膵体部)と尻尾(膵尾部)に分けられます。

では、どんな重要な働きをしているのでしょうか。膵臓の機能は外分泌と内分泌に大別されます。外分泌とは消化液を分泌する働きです。膵臓は炭水化物を分解するアミラーゼや脂肪を分解するリパーゼなどを出しています。これらの消化酵素がないと食物の消化吸収ができなくなり、命に関わります。

一方、内分泌とは血糖を下げるインスリンに代表されるホルモンを分泌する働きです。もし膵臓を全部摘出すれば、人体は危機に陥ります。大量の消化酵素を口から飲んだり、インスリンを注射で補給したりしなければなりません。大病院では膵臓がんで膵臓を全摘した患者さんの主治医として、夜も寝ずにインスリンを補ったこともありました。

糖尿病は血糖が高くなる病気ですが、それはあくまで結果であり、膵臓から分泌されるインスリンの量が少なくなったり、出てもその働きが低下したりすることが本質です。年々患者が

**消化酵素** 消化に携わる酵素の総称。タンパク質をアミノ酸に分解する酵素や、炭水化物を単糖類に分解する酵素、脂肪をグリセリンと脂肪酸とに分解する酵素などがあり、膵臓で作られるものが多い。

## なぜ「膵臓の時代」なのか

増加している糖尿病は、誰もが恐れるがんや認知症とも深く関与しているという事実が知られています。そう、万病の元になる糖尿病に、膵臓は深く関わっているのです。

おなかの中にある臓器といえは、真っ先に思い浮かぶのが胃や腸でしょう。それから肝臓や膵臓でしょうか。胆嚢や膵臓は、さらにその次だと思えます。これらの臓器の中で、肝臓以外は全摘しても生きることができません。胃や腸は全摘しても大丈夫。腎臓は2つとも摘出しても人工透析という手段があります。肝臓だけは全摘すると生きていけないので、肝移植という方法が模索されます。

では膵臓はどうか。前述したように消化酵素やインスリンを体外から補充することで、生きていくことはできます。しかし、大変煩雑な事態になります。

油ものや炭水化物、アルコールを取りすぎている人をたくさん見かけます。皆さんは胃や肝臓の障害を心配するかもしれませんが。しかし私は町医者という仕事柄、どうしても膵臓の障害を懸念します。慢性膵炎にならないか、膵臓がんにならないか、糖尿病にならないかが心配です。

現代は膵臓とどう付き合うのかを問われている時代のように感じます。次回からは、さまざまな膵臓の病気や、膵臓に負担をかけないライフスタイルについて考えてみましょう。

H29. 8. 1



長尾和宏(ながお・かずひろ)  
東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。平成7年、尼崎市で「長尾クリニック」を開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る、総合診療を目指す。医学博士。近著「病気の9割は歩くだけで治る!」「薬のやめどき」「痛くない死に方」はいずれもベストセラー。関西国際大学客員教授。59歳。